

## 平成 29 年度 第 1 回白馬高校学校運営協議会 議事録（概要）

1. 日 時 平成 29 年（2017 年）5 月 11 日（木）午前 10 時～11 時 30 分

2. 場 所 長野県白馬高等学校会議室

3. 参加者 9 名（欠席 1 名：横川委員）  
この他、長野県教育委員事務局高校教育課 3 名  
白馬・小谷両村関係者 3 名  
白馬高等学校職員 3 名



### 4. 次 第

- (1) 開会の言葉
- (2) 長野県教育委員会挨拶（塩野高校教育課長）
- (3) 白馬高等学校長挨拶
- (4) 委員自己紹介
- (5) 報告事項
  - ・学校の現状報告（北村校長）
  - ・平成 29 年度学校経営方針に係る具体的な取組

### (6) 審議事項

①平成 29 年度白馬高等学校の学校運営計画について（北村校長）

- ・組織編成
- ・学校関係予算

⇒ 平成 29 年度白馬高等学校学校運営計画を承認

②意見交換

<武田委員>

- 積極的に小中学校と交流してほしい。高校生と児童が身体を一緒に動かすことで、心がつながっていく。その中で地元子どもたちに白馬高校の様子や魅力を伝えてほしい。
- 小学校でも、英語が入ってきているので、高校生自らが小学生に英語の楽しさや勉強の様子を伝え、小中学生の目標となるようになってほしい。
- 小中学校との橋渡しについては、自身も可能な限り協力したい。

<岸委員>

- 地元の志願者が減少しているという理由をしっかりと分析しないと討議ができない。逆に普通科の方が増えたということもしっかりと分析してもらいたい。
- 中学生には国際観光科はホテルに就職というぐらいのイメージしかできないのかもしれない。国際と冠するので、英語が厳しく大変だと中学生にも伝わって志願者減と聞いた。運営協議会としてしっかりと分析したい。国際観光科の生徒たち、特に寮生は、学力でもトップということでもあり、実際の生徒の声を聴きたい。決して廃校寸前の学校の救済のために作った学科ではない。国際観光人材育成という大きな目的を再確認したい。

<横澤委員>

- 地元の中学からの入学生が減った要因はどこにあるのか、保護者、生徒自身どういことなのか、学校側でも分析してもらいたい。
- 小谷・白馬両村は観光に活路を見出しているが、白馬高校の生徒たちにも地域を知ってもらい、何かの形で情報発信してもらいたい。栃木県立那須高校観光科では生徒たちが俳句かるたを作って全国に発信している。白馬高校でもそんな取組を工夫すれば生徒たちが地域貢献できると思う。地元の観光を活気づけてもらえればと思う。
- 授業の中で「塩の道」を歩いたりして、観光資源の情報発信など工夫してほしい。

<宮嶋委員>

- 地元中学の進学ニーズが少ないという話を聞いて、第1期の生徒から英語の試験が大変だと聞いたのを思い出した。地元の中学生と話す機会があった時に、白馬高に行くかと尋ねたら、電車に乗って遠くの高校に行って、いろいろな人会遇到してみたいということも聞いた。県外からスキーや山岳を目指して来られた方も、同じようにきっと憧れて遠くから来ているということもあるかと思う。
- 新たな取り組みとして生徒の資格取得に取り組んでいる事はとてもいいことだと思う。
- 同好会の新設など活気が感じられる。生徒の声に耳を傾けて教育を充実させてほしい。

<奥原委員>

- 国際観光科の志願者が減少している理由は、英語に力を入れて頑張るのか、観光の資格を取るか、どちらを目的にして国際観光科ができたかというところで、英語の壁を感じているのではないか。要するに1日2時間とか1時間とか必ず英語の授業があるということで、英語が大変ではないのかとか、英検2級取得とか、自分がついていけるだろうか、という不安が出てきているのが一つの要因ではないかと思う。観光の勉強を本当にしたいという思いと、その上に英語をこれだけやらなくては勉強はできないということになってくると、結局高校を出てから、ビジネススクールのようなところに行っても同じではないかというような気持ちもあるようだ。高校から国際観光科に入って勉強することがいかに力をつけることになるのかということをもう少し子どもたちに分かりやすく伝えていってほしい。地元中学生は、白馬高生からかなり情報を収集しているようなので、その中でこんなに楽しいことがあるとか、こんなに将来の夢が広がってきたとかアピールできるような場を設けることが必要ではないかと思う。英語が先行しすぎているような気がする。
- 新設学科は1年目は新設人気というのがあるが、2年目3年目になるとトーンダウンする傾向がどこの学校でもある。専門性を高校生にどこまで求めるかということになる。英語科にしても理数科にしても音楽科にしても、最初は倍率が高くなる。成績が優秀な子が志望するケースが多い。だんだん頭打ちになってくるというのは、どこまで力を伸ばせるのかという事、たとえば3年後の進学先等の成果がはっきり出てくると4年目5年目から戻ってくる。白馬高校もこれから2年くらいの間はPRの工夫をし、国際観光科の目指す方向性をしっかり示していく必要があると思う。
- 今の2年生をみると非常に意欲的な子どもが多い。部活の加入率とか、公営塾の通塾状況を見ても、かなりの人数や割合になっている。1年生がこれから2年生にどれだけ近づくかということを考えて、昨年の入学生は、意欲とか希望とかを持って進学した生徒が多くいたのかと思う。1年生も同じような傾向ならばいいが、県外の生徒が多くなってくると、寮での生活と部活、塾との、両立が大変になってくるということで、通塾率や部活加入率が下がっているのではないかと思う。そのあたりはどうか。

<北村校長>

- 県外の生徒が増えたから加入率が下がったということはないと分析している。2年生は、各方面に積極的なのは確かだと思う。1年生と2年生の昨年同時期との比較などを次回示したい。その上で、またご意見をうかがいたい。

<松本委員>

- 寮については、県外生どのくらいまで、3学年で何人くらいまでとか、学校でも考えてもらいたい。村からの新入生が少なかったということは、非常に遺憾なことだが、学校に活気が出て、他地区からきている方が、これからの白馬小谷の宝だと思っている。その友人家族も大事にしていきたい。

<下川委員>

- 地元の子ども達が最優先ということが、一番の基本になる。地元の子ども達が白馬高校に入らないという原因と対策をしっかりと考えていただきたい。
- グローバル講演会でサッカーの岡田武史元全日本監督も来る。有名な人が講師として結構来てくれるということも宣伝して、白馬高校に来ると、こういう勉強ができるということをアピールしていかなければならない。

<白戸会長> まとめ

- 2年目最初の協議会で今後の論点が明確になった。具体的には次の2点かと思う。
- 1点目の地元入学生減少、地域への訴求力という課題だが、学校としてやれること、それ以外のこととある。自身の勤務先の大学に入学してくる学生にも入学後のカリキュラム等をよく知らずに来てミスマッチという例が多々ある。中学から高校ならなおさらだが、その意味で簡単には答えが出にくい。学校の分析も踏まえ、この運営協議会でも対策等を考えていきたい。
- 2点目は、国際観光科の目指す方向性と地域が期待する地元への若者の定着の関連だ。大学の観光系学科は、学びたい学生は多いが、学科としては、苦戦の連続だ。分析したところ、例えば観光と聞くと、遊びという捉え方をする方が多い。お子さんが観光に行きたいと言っても、親御さんは、それよりも将来のことを考えて経営学科に行った方がいいという傾向がある。一方、全国の高校の観光系学科は、バブルの頃に観光地の高校に設置された例が多いが、かなり苦戦している。バブル当時、ホテルや旅館の従業員を育てる目的で作られた。バブルが崩壊後、需要が下がってしまった。大事なことは、子どもの側がどんな働き方や生き方を地元でするのかを見出せるように、また、大人の側としては、どのように若者に地域に定着してもらうかということ、具現化していかないといけない。立派な国際教育を推進している秋田県立国際教養大学では地元秋田県への就職者が皆無に近いという皮肉な事例もある。英語にしても観光にしても、白馬や小谷では、白馬高校で何を目指す学びを創っていくのか、それを学校と自治体と一緒に示すことが大事だ。今日明日ここで議論して答えが出る課題ではない。1期生が卒業するころに何となく見えてくるくらいの時間軸だと思うが、この運営協議会でも研究していきたい。

(7) その他

- 第2回学校運営協議会は7月19日(水)10:00~12:00を予定

(8) 閉会の言葉